

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	玄海町立玄海みらい学園
-----	-------------

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

1 前年度 評価結果の概要	・授業方向上に向け、一人一授業公開を全職員で行った。授業者が工夫した手立て（ICT等の活用等）をTeamsで共有し、授業改善につなげることができた。前・後期でサガン夢先生等の体験活動の取組をより一層充実させたことで、児童生徒一人一人の夢や志を育み、進路意識を高めることができた。 ・各種アンケートをオンラインで行ったことで、業務効率化につながったが、情報モラルや特別支援教育に課題が見られたので、心の教育の充実を推進する必要がある。 ・義務教育学校として、ミドルリーダーを中心に学年による横の連携や校務分掌による縦の連携を強化することで、業務の効率化が進み、学校全体の協働体制が構築されてきている。
------------------	--

2 学校教育目標	みらいをひらく ～「すき」をみつけ、「よさ」をのばす～
----------	-----------------------------

3 本年度の重点目標	① 主体性の深化と発展を目指した義務教育9年間の学びの充実 ② 特別支援教育の推進と校内支援体制の充実 ③ 組織力を活かした業務の改善と時間外勤務時間の縮減
------------	--

重点取組内容・成果指標				中間評価		最終評価					
(1)共通評価項目										主な担当者	
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価			
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践 ・「書く」「話す」など自分の考えを伝え合う学習の充実と家庭学習の習慣化	○児童生徒によるアンケートで「自分の考えを伝える(書く)ことができた」に肯定的に回答する児童の割合が90%以上 ○家庭学習の各学年の目安時間を達成している児童生徒が75%以上	・授業中、児童生徒が必然的に書いたり話したりする授業づくりを行う。 ・授業方向上期間を設定し、相互に授業を見合い、児童生徒が目的をもって学習を進める授業づくりを行う。 ・「家庭学習の手引き」や「学習リズムチェック表」を配布し、家庭学習に対する保護者の意識を高める。 ・チャレンジタイムを活用し、基礎学力の定着を図る。	B	・教職員の90%が、授業の中に「書く」「話す」などの自分の考えを伝え合う場面を積極的に仕組んでいる。そのため、「自分の考えを伝える(書く)ことができた」という項目で、児童生徒の88%が肯定的な回答をしている。 ・全職員を小グループに分け、「指導と評価の一体化」を意識した校内授業研をグループ毎に実践し、授業改善に取り組みことができた。 ・家庭学習チェックカードの提出状況は90%で、各学年の学習時間を達成している児童が80%だった。家庭学習週間に欠席した児童は、各学年で異なる日別に実施したことで、家庭学習に取り組む児童が増えた。今後も、継続して指導し、家庭学習への意識を高めたい。	A	・教職員の約92%が、授業の中で「書く」「話す」など、自分の考えを伝え合う場面を積極的に設定している。そのため、児童生徒の約89%が、自分の考えを話したり書いたりしている」と回答している。保護者からの肯定的な回答も約90%と、学園での取組が評価されている。 ・小グループにいたる校内授業は自分の疑問や考えを出すことができ、全員が主体的になって授業改善に取り組みことができた。 ・基礎・基本の定着を図るための家庭学習への指導に関して、肯定的な回答をした教職員が約97%、保護者が約94%だった。各学年の目安以上家庭学習に取り組んでいる児童は児童生徒全体の約49%で、目標には達しなかった。児童生徒が自ら指導をもて意識的に家庭学習に取り組めるように、今後も指導を継続していく。	A	・全職員で、学習評価について取り組んでいることはよいことである。 ・机上の学習だけでなく、校外学習をしたり、講師を招聘したりするなど、多様な学習活動をしている。 ・「自主学習ノート」の展示を見た。よく学習していると感じるものも多くあったが、そうではないものもあった。家庭学習の充実にも継続して取り組んでほしい。 ・子どもたちの視野を広げるために理解したことや考えたことを発信する機会を今後も大切にしていただきたい。	・学力向上コーディネーター ・研究主任 ・学習部	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○前期課程の縦割り遊びを年6回以上行い、異学年との交流を図る。 ○縦割り班での奉仕活動や集会を行う。 ○人権集会を年7回行う。	・前期課程児童による縦割り遊びを行う。 ・縦割り班で1年生を迎える会、仲良くなろう集会、校内奉仕作業を行う。 ・人権集会の実施と授業を通して人権・同和教育を行い、学校全体で指導にあたる。	B	・1年生を迎える会は、雨天のため体育館での集会を縦割りでの会食となった。班のメンバーの名前と顔を見え、絆が深まった。 ・職員の個性を生かし、全職員交代で視点を浴びた人権・同和教育を行うことができた。「友達の違いを受け入れて接している」という肯定的な回答をした児童生徒は98%である。今後も、授業等を通して、全職員で指導にあたる。	A	・年間を通して、計画していたものは、実施することができた。特に、学期に1回の縦割り班活動では、代表委員会で話し合いをもとに、児童のアイデアを生かして、児童主導で行うことができた。高学年の児童のリーダーシップを発揮するよい機会となった。 ・全職員の個性を生かした人権教育ができ、職員相互の学習にもつながった。	A	・命や人権について考える機会をもっているのはよいことであるので継続を望む。 ・学校だよりや児童生徒へのアンケートの結果から、子どもたちが成長していることが分かる。 ・成果指標と「具体的取組」の整合を図るようにしてもらいたい。	・特別活動主任	
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「いじめに気づき、注意したり、先生に知らせたりできた」という肯定的な回答をした児童生徒80%以上 ○いじめの発生時に組織的な対応ができていて肯定的な回答をした職員90%以上	・毎月末の生活アンケートを活用する。 ・発生したいじめ事案をその日のうちに共有できるように、生徒指導部が中心となり、管理職の指示のもと全職員と連携を図る。	A	・「いじめに気づき、注意したり、先生に知らせたりできた」という肯定的な回答をした児童生徒は85%である。いじめに対する生徒の意識がさらに高まるよう、今後も指導を継続していく。 ・「いじめの発生時に組織的な対応ができていて」と肯定的な回答をした職員は100%であった。	A	・「いじめに気づき、注意したり、先生に知らせたりできた」という肯定的な回答をした児童生徒は86.2%増加している。いじめに対する生徒の意識がさらに高まるよう、今後も指導を継続していく。 ・「いじめの発生時に組織的な対応ができていて」と肯定的な回答をした職員は100%であった。今後も連携して対応していく。	A	・いじめやけんかなどが起きたときには、すぐに保護者に連絡して対応できると聞いて安心した。早期発見と早期対応の継続を望む。 ・今後も児童生徒のアンケートの結果をよく分析して指導に生かしてほしい。	・生徒指導主事 ・生活指導主任	
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていて、異学年と交流した児童生徒90%以上」 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒70%以上	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていて、異学年と交流した児童生徒90%以上」 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒70%以上	・朝の時間に職員による講話「みらいへ」といひらを実践し、多様な考え方や生き方について学ぶ。 ・学校行事の中で「出番」「役割」「承認」を実施することで、自分のよさや可能性に気づき自己肯定感を高める。 ・外部講師を招き、将来の夢や目標の取組について話を聞くことで将来の自分について考える時間をとる。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていて」という回答をした児童生徒は85%である。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒は77%である。 ・月に1回「みらいへのどひら」を実施し、多様な価値観に触れる機会を設けている。 ・今後も学級活動や道徳の授業等で児童生徒に働きかけていく必要がある。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれていて」という回答をした児童生徒は89.1%増加した。 ・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒は76.4%であった。 ・文化発表会での発表や各学年行事、学年活動において、実行委員を設け、生徒が主体となって取り組む機会を設けることができた。また、後期課程では、職業講話を実施し、将来について考える機会となった。 ・月に1回「みらいへのどひら」を実施し、多様な価値観に触れる機会となった。	A	・職業について、町内だけでは視野を広げるのには限界がある。今後も機会をつくって、いろいろな体験を積むことができるようにしていただきたい。 ・低学年期は、夢や希望は抽象的なものであろうが、8、9年生とすると、かなり明確になってくるだろう。今後できるだけ具体的な目標を定めるように指導していただきたい。	・学習部 ・道徳主任
●健康・体づくり	①「運動習慣の改善や定着化」 ②「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	①授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間420分以上の児童60%以上、生徒80%以上 ②健康に良い食事をしている児童生徒85%以上	・昼休みには体育館や運動場の使用割合を決めて開放する。 ・ゲストティーチャーを招き、リズムトレーニングに取り組むことで体を動かす楽しさを体験させる。 ・校内持久走大会を実施し、体育の時間や休時間に運動場を使うことを呼び掛ける。(前期) ・部活動への積極的な参加を呼び掛ける。 ・朝食喫食や残菜0を呼びかける。 ・給食だよりを発行し、保護者への啓発を図る。 ・給食時間の指導や授業などで、食に関する指導を実施する。	B	・「私は、体育の授業以外で1週間7時間以上、運動やスポーツができています。」「について、肯定的な回答をした児童が76%、生徒が68%である。 ・引き続き昼休みの体育館や運動場の使用を呼び掛けていく。後期課程は、運動部に加入していない生徒への運動の呼びかけを行う。 ・「私は、健康に良い食事をしていると思います」について、肯定的な回答をした児童が85%である。 ・給食指導、児童生徒による放送で残菜0を呼びかける。朝食喫食について給食だよりによる家庭への啓発を継続する。	B	・「私は、体育の授業以外で1週間7時間以上、運動やスポーツができています。」「について、肯定的な回答をした児童が75%、生徒が65%であった。 ・前期課程ではゲストティーチャーを招いてリズムトレーニングを学期に1回行い、体の動かし方を学ぶ場を設けた。今後は、後期課程の運動部に入部していない生徒が運動に親しみながら、より主体的な体育の授業の取組を行っていく必要がある。 ・「私は、健康に良い食事をしていると思います」について、肯定的な回答をした児童が85%であった。 ・朝食喫食や残菜0の呼びかけは、児童生徒の放送や給食指導の中で実施することができた。また、給食だよりや試食会講話を通して、家庭への啓発を行うことができた。	B	・前期課程の子どもたちが、目標値に達することができたことはよいことである。縦割り遊びや持久走大会など意欲的にその機会が与えられていることの成果であらう。 ・後期課程は、運動系の部活動をしている子どもとそうでない子との差があるであろう。学習量の増加もあり難しいところではある。 ・9年生のアンケート調査は、部活動を引退した後にこれらを行っているので、運動量の数値が落ちるのは必然であろう。年間を通して回答できるような質問の仕方が妥当であらう。	・体育主任 ・学校栄養職員	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ○「時間外在校等時間の上限を意識して改善に努めている」と回答する職員の割合90%以上	・定時退勤日及び部活動休養日を設定し、履行する。 ・業務改善を提議に入れたデータを整理することにより、業務の効率化を図る。 ・業務記録を確認し、意識の向上と業務の効率化に取り組む。	B	・「時間外在校等時間の上限を意識して改善に努めている」と肯定的な回答をした職員は85%である。 ・定時退勤日においては、早く退勤する教職員が多いが、徹底はできていないので、さらに申し掛けを行っていく必要がある。 ・できるところから、校務用の電子データ整理に取り組んでいるが、データが膨大ためあまり進んでいない。今後も、少しずつ進めていく必要がある。	A	・「時間外在校等時間の上限を意識して改善に努めている」と肯定的な回答をした職員は、約87%であった。 ・時間外在校等時間の上限を全員が守るまでに至っていないが、定時退勤日や部活動がない日には早く退勤するなど、上限以内の時間で勤務する職員が増えている。	A	・教員のなり手が少ないということが言われている。長時間労働からの疲労感がその要因だと思われる。みらい学園は、町の先生方と連携し、教育活動に熱心に取り組む、前向きで魅力のある学校だと捉える。その魅力を広く発信していくほしい。	・管理職	
●特別支援教育の充実	○児童生徒一人ひとりの理解や個に応じた指導・支援の工夫・改善	○児童生徒一人ひとりの実態把握と理解をめぐり、各学期に一回以上、全職員による情報共有の機会を設ける。 ○特別支援の視点を取り入れた、全職員対象の研修を年に一回以上行う。	・年度初めや学校行事の前など、適切な時期に要理解児童生徒について情報交換の場を設けたり、会議を開いたりしてよりよい支援につなげる。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて共通理解を図る。	B	・個別的教育支援計画を改定するため、特別支援担当室で話し合いをもった。その時間が、支援に関する研修となった。 ・ケース会議を開き、支援を要する児童生徒を学年職員全体で支援する体制ができた。今後は、他学年との連携にもつなげていきたい。 ・特別支援の研修を2回実施した。さらに研修を深めたいという声が聞かれ、有意義な研修を進めることができた。	A	・特別支援学級の担任は、個別的教育支援計画作成や日頃の児童生徒との関わりを通して、要支援の児童生徒に対する理解を深めることができた。 ・児童生徒に応じて、適宜、ケース会議を開き、関係職員全員で共通理解を回った上で、具体的な支援につなげることができた。	A	・児童生徒のよりよい支援のために教職員同士が情報の共有や指導体制づくりに尽力されていることが納得する。 ・児童生徒同士が認められ、受け入れられる学園であることを望む。 ・児童生徒は様々な特徴をもっている。個に応じた支援を引き続きお願いしたい。	・特別支援コーディネーター	
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目											
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
○地域を生かした学びの充実	○9年間を貫く海洋教育の取組	○実施計画に掲げる目標の達成率を80%以上にする ○各教科等の学習内容に「海とのつながりを見いだすようになった」と回答する児童生徒を90%以上にする。	・現地調査・分析、体験活動 ・ゲストティーチャーを招聘しての探究活動 ・児童生徒による情報発信活動	B	・ヨットの試乗体験やビーチコミングなど直接的に海に触れる体験活動を行う事ができた。 ・地域に出かけ取材したり、講師を招聘し話を聞いたりするなどの調査活動も計画的に行っている。 ・今後は、情報発信活動の充実を求めている。	A	・予定していた体験活動や取材活動、講師による講話などの調査活動を概ね計画通りに行うことができた。 ・「海洋教育とともミット」や「全国海の中学び発表交流会」での実践報告や小冊子の発行により情報を発信することができた。 ・「海とのつながりを見いだした」と回答した児童生徒は84%であった。	A	・海を臨む玄海町の地利を生かして、今後も海洋教育の充実を図ってみたい。 ・海洋教育のひとつとして発表会があるということなので、そのような機会を子どもたちの成長につなげていただきたい。	・副学園長	

5 総合評価・次年度への展望	・小グループ単位で授業研究会を行ったことで、全員が主体性をもって授業改善に取り組むことができた。また、基礎・基本の定着を図るために家庭学習の指導を行ってきたが、家庭学習が十分ではない児童生徒もいるので、家庭学習の充実に継続して取り組む必要がある。 ・職員による朝の講話や外部講師を招聘しての講話など、多様な考え方や生き方について学ぶ機会を設けたことで、発達段階に応じて児童生徒が夢や目標をもつことができた。しかし、職業について視野を広げるためには、町内だけでは限界があるため、今後も様々な体験を積む機会を設けていきたい。 ・特別支援教育に関する研修を実施し、支援が必要な児童生徒への対応について理解を深めることができた。児童生徒のよりよい支援のために、今後も適宜ケース会議を開き、共通理解を図る上で具体的な支援を行ってきたい。 ・「時間外在校等時間の上限を意識して改善に努めている」と肯定的な回答をした職員は、約87％であった。定時退勤日や部活動がない日には早く退勤するなど上限以内の時間で勤務する職員が増えているので、時間外勤務時間をさらに縮減できるよう、今後も業務改善に努めたい。	
----------------	--	--